

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
 会員向けニューズレター
 発行人 古川 彰久
 事務局 〒252-0321 神奈川県
 相模原市南区相模台1-23-9
 Tel.&Fax.
 042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
 E-mail: info@iki2life.com

2月例会ご案内

日時 : 2月13日 木曜日
 18:30 ~ 21:00
 場所 : 港区立商工会館
 参加費 : 1000円
 テーマ : 城野先生のDVD「東西古今人間学」の鑑賞会 第12回目
 司会 : 榊原 高明

DVD「東西古今人間学」第3巻第6回後半要旨
 <中華人民共和国の誕生と毛沢東>

- (1) 憲法：中国の経済は4つ
 ①社会主義経済：国民党から没収した工場等を国有化。
 ②合作者経済：土地改革により、地主の土地を貧農へ、協同耕作、人民公社へ。
 ③資本主義経済：資本家への便宜を図る。
 ④个体経済：自作農。
 (2) 権力者としての毛沢東

実際に合ったことをやって成功した。権力の絶頂に居ると、反対する奴がいなくなり、廻りにおべっか使いに囲まれ、新しい知識が入らなくなる。更に自己顕示欲も強くなる。

劉少奇：一時は毛沢東を褒めたが、その後、対抗馬になると殺された。

毛沢東の写真、選集の配布：紙が足りなくなる。

毛沢東学習：国として推進するのは、行き渡っていない証拠といえる。

資本化の力が付いて来ると、インテリも力を持ってくる。相対的に共産党員の力が落ちてくる。無産階級を育てる必要があるが、下を育てないで対抗者を殺す。

反右派闘争：資本化征伐や知識分子狩り。
 当初以下の4つの政党が認められた。

- ① 中国共産党
 - ② 中国国民党革命委員会
 - ③ 中国民主同盟(資本家、知識分子)
 - ④ 中国農工党(中産階級、知識分子)
- ②~④は中国共産党の支配を受ける。

中国民主同盟をやっつけるために百花斉放をやった。：自由に発言しても良いとのことで少しずつやりだし、しばらくすると次々と意

見を出しだした。1年ぐらいたったらみんな捕まえてしまった。知識階級はものを言えなくなった。

文化大革命：毛沢東と違う考えを持った次の政権を担うものをやっつけた。

この20~30年間中国は発展しなかった。
 <毛沢東から教訓を学ぶ>

文化的にも経済的にも、実際に即してやったことはうまくいったが、教科書通りやったことはうまくいかなかった。求めているものをやればうまくいく。この間、中国は発展せずに、日本がなぜ発展したのか。日本には倒産という制度があるが、中国には無い。経済は人間の動きである。命を維持するための物質的基礎・手段を作っていくこと。それぞれの国は、昔からの歴史的な違いを持っている。

アメリカ：多民族国家

日本：単一民族、単一文字、統一体になりやすく階級が無い。

西欧(仏、独)：貴族がまだ残っており、階級的差別はまだ大きい。

日本では、明治に天皇親政となり、藩屏として華族を作ったが、ヨーロッパやインドのような階級支配は出来なかった。日本では教育制度も行き渡り、戦略統一が出来やすい。中国における戦後の日本人の引き揚げは、負けた国の人が整然と引き上げた。

民族的なやり方を把握していき、求めていくものに合致していくことが大切である。

<人間学から学ぶこと>

これまで、信長、秀吉、武田、上杉、ヨーロッパではナポレオン、中国の三国志等から、歴史上の著名な人たちの行動の中から、どのような教訓が引き出せるのかを見てきました。特に人間の扱い方が重要ですね。信長のやり方は、部下を大きくしていく、また、大きくなっていく過程で新しい人材を抜擢する。その下で秀吉、明智、柴田、丹羽、滝川、池田等の武将が大きくなった。秀吉は最初は部下はいないが、戦ごとに大きくなり、高松城攻撃に際しては毛利軍全軍を相手にするほど3万人位になっている。信長が秀吉の才能を発揮させたといえる。

1 2 月 例 会 報 告

日時 : 1 2 月 1 2 日 木曜日
18 : 30 ~ 21 : 00
場所 : 港区立商工会館
テーマ : 城野先生のDVD「東西古今人間学」の鑑賞会 第10回目
司会 : 松本 友

DVD「東西古今人間学」第3巻第5回後半要旨
ナポレオンにみる人間学後半

1. ナポレオンの成功

(1) 他人の協力を得るには

言うことを聞かそうと思っても人は従わない。しかし自分にも利益があるとなれば相手も協力する。そこが発展するかしないかの違いとなる。

(2) ナポレオンの連戦連勝と欧州制圧

ナポレオンが連戦連勝できた社会体制を見てみよう。

当時の欧州各国は、王制をしいており、各国の軍隊は王様の雇い兵であった。

雇い兵の場合には、逃げられないように前線に並べて、後ろから監視するような体制になる。兵隊の死傷率が高くなり、動きが遅くなる。

これに対し、フランスの革命政府の軍隊の編成は、志願兵による国民軍となった。戦略目標を持った志願兵では散兵＝散らばって寝打ちが出来る。

ナポレオンは、このような社会革命の恩恵を受けた国民政府軍を利用し、自らの大砲の知識を活用し、砲兵を前面に持っていき、まず大砲で敵の前線の歩兵をつぶし、騎馬連隊を活用して、連戦連勝し、全欧州の制圧に成功した。

戦略目標を持った軍隊の例は他にはアメリカの独立戦争がある。

2. ナポレオンの失敗

(1) ナポレオンには戦略が無かった

ナポレオンが自ら皇帝になり、新しい貴族を作ったということは、国民政府軍の士気に依存しながら、ナポレオン自身には戦略が無かったといえる。

(2) 無謀なロシア侵入

これまでの欧州制圧においては、それぞれの国の王様の軍隊を打ち破れば、勝利できた。しかし征服された国民は腹を立てる。

ナポレオンの戦争の過程でフランスでは兵隊の数が少なくなる。

ロシアには各国から兵隊を集め、連合軍50万人で攻め込んだが、烏合の衆とも言える。

これまでのナポレオンの考えでは、ロシア皇帝をやっつければ良いとなるが、ロシアの皇帝はとっとと逃げて戦争をしない。

モスクワの手前まで行ってしまい、ボロジノでロシア軍が迎え撃った。

両軍とも大きな損害を被ったが、連合軍はモスクワに入った。ところが、町を焼かれて、冬の支度をしていない連合軍はどうにもならない。逃げるとなると追いかけてくる。50万いた連合軍は、国の境では2万になった。こっちの意見を押し付けていたのでは思うようにならない。

(3) 降参して、コルシカ島へ

ナポレオンは一旦体制を整えるが、ウオータールーの戦いで敗れて没落した。

個人的な征服欲で、自分のことしか考えられなくなった。そうすると相手は言うことを聞かない。結局大負けして退位せざるを得なくなった。

3. ナポレオンから教訓を学ぶ

戦略は自分一人だけ持っていても駄目。部下の一人一人が全部その身に呈した時に力になる。

企業においても、経営者の戦略が、社員の中に生きていなければ戦略とはいえない。自分がこれまでに無い条件を利用できた場合に、うまく乗っかると急速に変化できる。日本の戦後の復興において、欧米のように財閥が金を出したのではなく、日本は国民の一人一人の預金と税金を活用して、波に乗った。この間、英雄は一人も出ていない。英雄は戦略を持った国民だといえる。

日本の社会では英雄は出てこない。皆で仲良くやっけてどんどん発展させるほうが良い。

以上の内容を受けて、意見を集約すると、
ナポレオンの成功から学ぶこと

ナポレオンの部隊は革命軍であり、ひとりひとりが戦略目標をもって戦っている。だが、国王の軍隊は所詮雇われ兵、なるべく戦争をしたくないし死にたくないのそこまで本気で戦う気がない。勝てるわけがない。

皇帝になると

ナポレオンの戦略がなくなる。なぜなら皇帝の地位を守ることにしか考えなくなったから。その後の戦争では、互いに多くの兵隊が死んでしまい戦力が減る。ロシアには50万人で行った。フランス軍だけではなく他の国の兵隊がたくさんいた。戦略目標はなかった。短期戦だと思っていたから冬服を用意しておらず、50万の兵が2万に。パリまで逃げて帰り、コルシカ島へ流された。

ナポレオンが皇帝になった後、戦略が無くなったという点を現代に置き換えると

ベンチャー企業は少人数だがそれぞれが戦略目標を持って戦っている。しかしながら、大企業の社員はすでに出来上がった組織の中で働いているので上からの指示でしか動くことができず、それでは戦略目標の無い戦いになってしまう。

一概には言えないが、大企業のサラリーマンの大半は学歴・コネや働き方改革で残業もしない傾向が強い。無駄な FAX・印鑑・会議などがあり戦術なき戦略上司の元で働いていると最終的には自分のことしか考えない、相手主義ではなく自分主義になってしまうと思う。

海外ベンチャーの場合はやる気に満ち溢れ、新しいことを自ら創り出し、長時間労働を厭わない。ジャック・マーの 996 は有名。日本企業が働かない間、海外の勢いあるベンチャーが長時間労働&効率よく働いているという構図は今後日本はどうなっていくんだろうと心配になる。

焼け野原から立ち上がった日本

日本人はもともと同じ言葉を話す単一民族であることもあって、ひとりひとりが戦略目標を持ったときに力を発揮できる。そのため、戦争、そして戦後、焼け野原から立ち上がる時の力はとても大きかった。

しかし、成長を成し遂げた後にナポレオンが皇帝になったかのような状況に陥る。

もともと日本のお家芸だった電化製品を例にとってみる。例えばスティープジョブスは製品が 1 番、顧客は 2 番という考えではあったが、ジョブス本人が一番の顧客であったため、自分たちが使いたいものを作るんだ!という気持ちで製品を作っていた。日本でも本来は顧客の声が 1 番のはずが、企業として大きく成長してしまったために自分たち都合・効率・コスト削減が優先されてしまい、機能ばかり追加されてお客が取り残されてしまう。例えば TV は電源と音量とチャンネルボタンだけあればいいしトイレも流すだけあればいいのに、いろんな機能やボタンがついてしまった結果、水を流すつもりがウォシュレットの水が飛び出てきたり。。。エレベーターの開けるボタンを押し間違えて、人が乗ろうと走ってきているのにも関わらず閉めてしまうのはなぜだろうということ、もう一度改めて考えた方がよいのかもしれない

いと思った。

加えて、中小企業を例にとると、創業者は 0 から 1 にした力を大いに発揮できたけれど、何も苦勞せず親から受け継いだ会社だと 3 代目が会社を潰してしまうということと同じ現象ではないかと感じる。ユニクロは山口から世界の大企業へと上り詰めたけれど、この後ナポレオンのようにになってしまうのか。かつてのダイエーのように。

ホンダは本田宗一郎の思想哲学や戦略目標を全社員が共有している気がするけれど、SONY は残念ながら井深・盛田思想哲学・戦略目標を共有し続けられなかったのではないかな。どんな大きな組織や小さな会社でも、創業者の思想の芯の部分をしっかり持ちながら、時代の変化に対応していく必要があるべき姿だと思う。徳川幕府が長く続いたのはなぜかを城野さんに聞いてみたかった。

相手も良いと思うことを与えないと応じてくれない。こっちの意見を押し付けてばかりでは思い通りにならない。つまり、人のことを考えるから相手も自分のことを考えてくれる。

話が飛躍するかもしれないが、政府が金をばら撒き補助金や公共工事をしているのはもしかしたら、国民 1 人 1 人に戦略を持たせないようにするための国の操作なのかもしれない。

ナポレオンが何をしたかというのは結果としては凄いようだけれど人間としてはなんてことない、大砲を山の上に上げるために車輪でコロコロと転がしたばかりのこと、と考えると大企業の社長でも偉い人でも 1 人の人間と考えれば大したことないのかもしれない。そういったことをどう感じて考えるかで人付き合いや仕事の仕方も変わってくるかもしれない

戦略の方向を間違えないよう判断したい頭の使い方だけなので、英雄でも 1 人の人間として単純に手と足と口を使って何をただけなのかを冷静にみてみようと思う。

城野さんの生きた時代とナポレオンの生きた時代は全く違うのに城野さんのビデオから聞く話は、なぜかその時代にいたんではないだろうかという甲乙情報のように思えて、肉声の映像での鑑賞はとても有意義な時間でした。

